

《論 説》

マカロクのリカードウ『経済学原理』評

——価値論に限定して——

羽 鳥 卓 也

I 課題の限定

リカードウの『経済学原理』の初版が刊行されたのは、1817年4月19日であったと言われているが、出版後間もない5月3日に、スコットランドの新聞『スコツツマン』(The Scotsman)に匿名者による、短文ではあるが、きわめて好意的な書評が掲載された。その内容は、書評というよりも原典の要領のよい紹介であった。この書評の筆者がJ. R. マカロクであることは、間もなく明らかになった。

それから一年余り後、『エディンバラ・レビュー』(The Edinburgh Review)の、1818年6月号に、やはり匿名者によるかなり長文の書評が掲載された。これも書評というよりも解説に近い性格のものであったが、当時の知識人の注目をひくだけの内容を含んでいた。⁽¹⁾

この雑誌が実際に刊行されたのは、1818年の8月に入ってからのもので

(1) [J. R. McCulloch,] Principles of Political Economy and Taxation, by D. Ricardo, *The Edinburgh Review*, June 1818, pp. 59-87. ただし、この論説はすでに相見志郎氏によって翻訳されている。(相見「マカロクのリカードウ『経済学および課税の原理』の紹介」同志社大『経済学論叢』19の3, 1971.)

あったようだが、マルサスは8月16日づけのリカードウあて手紙のなかで、次のように書いた。「御高著が『エディンバラ・レビュー』で好評を得たことに心からお慶びを申し述べます。私はこれまで、検討の対象となった著作の諸見解に対してこれほど完全に賛意を表した論説がこの雑誌に掲載されたのを見たことはなかったと思います。もしこの論説の筆者がもっと多く自分自身の考えを述べているように見えたならば、おそらくこの書評はより大きな効果をあげたことでしょう。しかし、もし彼があらゆる点で本当に御高見に賛成していたのだとすれば——彼は実際に賛成していたようですが——これは容易なことではなかったでしょう。それはともかく、この書評は御高著を普及させ、学兄の名声をひろめるのに大いに貢献することになりましょう。私はこの筆者が誰なのかを知りたいと思います。」(Works of D. Ricardo, V, pp. 278-9. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。)

この匿名者による書評の特徴をマルサスは鮮やかに描き出している。これは書評というよりもすぐれた解説であって、リカードウ経済学にかなり精通した人物でなければ、これだけの文章は書けないだろう。マルサスはそう考えて、評者は多分J.ミル、そうでなければD.ビュキャナンではないか、と推測したのであった。しかし、この書評の筆者はマカロクであった。リカードウは8月20日にマルサスあての返信を書いた。「『エディンバラ・レビュー』で、拙著の評者が拙論に惜しみなく賛辞を与えたのを喜んで下さったことに対して感謝いたします。あの論説を読んで、私はすぐに筆者がマカロク氏であると推測しました。というのは、拙著の出版以来、氏は私が拙著の読者に印象づけたいと思っていた見解を心から支持しているように思われるからです。……もっとも、あの賛辞は拙著の真価をはるかに越えたものであって、もし筆者がいくつかの箇所で異議を混ぜていたなら、おそらくより大きな効果をあげていたでしょう。」(Works, V, p. 282.)

マカロクの書評は、マルサスが不満を感じたように、そしてリカードウも物足りなさを感じたように、異見らしいものを少しも含んでおらず、リカー

ドウの著作に対する要領のよい解説文と最大級の贅辞のみから成っていた。それにもかかわらずマカロクの文章が当時の知識人から注目されたわけは、リカードウの著作が高度に理論的な内容を持ち、一般読者にとってはなほだしく難解であったのに、マカロクが原典の晦渋な文章の引用を極力避けて、原典を彼なりに自家菜籠中のものとして消化し、達意の文章で平明な解説を与えることに一応の成功を収めたからであった。

しかし、どれほど見栄えのする解説文であっても、解説文はあくまで解説者の所産であって、原作の忠実かつ正確な再録ではない。マカロクの解説とリカードウの著作との異同の有無を検討し、検出された「見解の差異」の意味について考察を加えることは、リカードウ理論の内在的な理解を志すためにも、学史上におけるリカードウとマカロクとの継承関係を明らかにするためにも、不可欠の課題であろう。本稿は、マカロクがリカードウの著作の価値論の章の前半部分にいかなる解説を与えたか、という点について若干の検討を加えることに課題を限定する。

このマカロクの書評の範囲は、価値論の章の後半部分をも覆うだけでなく、価格論、地代・賃金・利潤を論ずる分配論、外国貿易論、さらには課税論にまで及んでいる。しかし、本稿で与えられた紙幅には制約があるから、これらの領域について論及する余裕はない。

Ⅱ マカロクの解説

マカロクの解説によって、リカードウ『原理』初版の価値論の章の前半部分の内容を知ること努めよう。以下、マカロクの叙述の順序にほぼしたがって、紹介することにするが、次節以下での検討のための便宜上から、マカロクの解説を6個の項目に分けて紹介することにした。

第1項 マカロクはリカードウ価値論を解説するにあたって、商品の市場価格と自然価格との関連について考察することから始めているが、こういう

マカロクの価値論研究への案内の仕方は、興味深くはあるが、注意されなければならぬ問題を含むだろう。マカロクによれば、商品の市場価格は当該商品をめぐる需給事情の変動によって絶えず変動するけれども、長期的にはその生産費に合致する傾向があるというのだが、彼はこういう市場価格と自然価格との関連を示すことによって、商品の交換価値は需要・供給の法則によって規定されるという、通俗の価値学説が皮相な現象記述にとどまるものにすぎないと批判するのである。

彼の意見では、こういう需給説的価値論は交換価値の短期的変動の説明原理としてしか有効性をもたないのであって、「この推理を無限の期間についてまで延長することほど間違ったことはありえない。あらゆる商品の交換価値の永続的で究極的な規定要因は生産費 (*cost of production*) である。」

(p. 61. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。)

彼は商品の交換価値が永続的にはその生産費に合致する傾向があるということを描いて、こう述べている。「もし帽子の市場価格 (*market price*) がその真の価格 (*real price*) よりも高く引き上げられたとすれば、資本はその産業部門に流入してきたことだろう。そこで、競争が間もなく帽子の価格をその自然的水準 (*natural level*) に、つまりその生産費——ただし、そのなかにはその製造業に投下された資本に対する通常率の利潤が含まれているが——を償うだけの金額に引き下げたことだろう。」 (p. 61.)

要するに、市場価格が長期的には生産費に合致する傾向があるのは、産業諸部門間には利潤率均等化のメカニズムが作動しているためだというのであって、こういうマカロクの文章は、リカードウ『原理』の「自然価格と市場価格」という表題を与えられた章の内容の要約文にはほかならなかった。マカロクはこの価格論の記述を価値論研究の導入部として利用したのである。ただし、ここで付言する必要があるのは、この最後の引用文のなかに「真の価格」と書かれた語は、スミスやリカードウが「自然価格」と呼んだものと同義語だったということである。この引用文の前後におかれた文章のなかで

も、マカロクは「自然価格」と同じ意味を表わす語として「真の価格」という語を繰り返し用いていたのであって、われわれはこの事実を記憶にとどめておく必要がある。

第2項 なぜ商品の市場価格は永続的にはその生産費に合致する傾向があるのか。この問題に説明を与えたマカロクは、次に考察すべき課題についてこう書いている。「今や、われわれはリカードウ氏が彼の著作の冒頭に据えた研究に注意を向け、商品の生産費を規定する諸事情とその真の価格 (real price) に入りこむ諸要素とを確定することに努めよう。これは経済学全体のなかで最も根本的な研究であるから、他のすべてに優先して最も重要である。」(pp.62-3.)

マカロクは「生産費を規定する諸事情」と「真の価格の構成要素」とを明らかにしていくという形で、リカードウ価値論を解説したいと言っている。これもまた、マカロク独得の解説の仕方といわなければならない。

さて、マカロクはスミスの所見——商品価値の規定要因を投下労働量に求める見解の適用範囲を社会の「初期未開の状態」に限定したスミスの所見を批判することから、議論し始める。マカロクによれば、スミスおよびその追隨者は、資本の蓄積と土地の専有という事態においては「資本の利潤と土地の地代とが価格のなかに構成部分として入りこむことになる」と考えた。彼らは、商品の真の価格 (real price)、つまりその生産費は、通常利潤率、賃金率および土地の地代が上昇する度ごとに上昇するだろう、と考えた。」(pp.63-4.)

マカロクの解説によると、スミスは資本の蓄積と土地所有とによって商品価格が賃金・利潤・地代の三者から構成されるようになり、したがって価格がこれらの構成要素の変動にもとづいて変動することになる、と主張したというのである。そして、マカロクによれば、リカードウの価値論はこのようなスミスの所見を批判するものとして提示された、というのである。

「しかし、リカードウ氏は〔スミス博士とは〕きわめて異なる意見をもっている。氏は、資本の蓄積と地代の支払とが商品の真の価格 (real price) を

上昇させるような影響を少しも及ぼさないと考え、あらゆる場合に……商品の交換価値は、商品を市場にもち出すのに必ず必要とされる労働の分量の増加があつてはじめて上昇しうるのだ、と考えた。」(p.64.ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。)

リカードは社会状態の変化が「真の価格」の規定要因を変化させるわけではないと考えた、というのである。なお、この引用文でも、マカロクは「真の価格」の語を「自然価格」の同義語として用いているようである。

第3項 次に、マカロクは、各種産業部門で使用される労働に質の差異があるということも、労働価値論の定立にとって少しも支障にはならない、という論点を解説する。

「もし社会の未開状態において一頭のビーヴァーを仕止めるためにあてられた一時間の労働が、よりすぐれた熟練と活動力、あるいはより大きな活気ある努力を必要とするために、後者の〔一頭の鹿の捕獲に要した〕まるまる一日分の労働と等価であると計算されたなら、一頭のビーヴァーは一頭の鹿と交換されたことだろう。狩人たちがある狩猟業者、つまり資本家に対する使用人として就業した後では、ビーヴァー狩りに一時間従事した使用人の賃金は、鹿狩りに一日従事した使用人の賃金と等しいだろう。そして、双方の労働の生産物は、市場で依然として同じ相対価値を保持するだろう。」(p.65.ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。)

マカロクによれば、各種の労働の間の熟練度や強度の差異は、「未開の状態」では当該労働の生産物の交換価値に反映されるし、また蓄積後の社会では賃金の支払額に反映されるだろうから、われわれはこれらのものの差異を指標として質の異なる労働の量的還元について大体の目安をつけることができる、というのである。

第4項 マカロクは本題に戻って、次のように論述する。——スミスは、蓄積によって生産物の価格が賃金と利潤とによって構成されるようになるから、価格が賃金の騰落に依存して騰落するようになる、と考えた。しかし、

スミスの見解は誤りである。「未開の状態」ではなるほど「スミス博士が指摘したように、労働者の労働の全生産物が労働者自身に帰属するだろうが、これは、彼らが別の人の使用人になった時、彼らが製造する商品の交換価値が少しでも影響を受ける理由になるわけではない。」(p.65.)「あらゆる商品の真の価格 (real price) つまり交換上の値打 (worth in exchange) を決定するのは、この〔商品の生産に投下される〕労働量なのであって、労働によって生産された価値 (value) が後になって分割される仕方なのではない。」(p.66.)

この引用文では、マカロクは「真の価格」の語を「交換上の値打」と言い換えているけれども、「労働によって生産された価値」のことを意味しているようにも思われる。つまり、ここでは「真の価格」の語は、マカロクによって、これまでのように、「自然価格」の同義語としては使用されていない。ところで、マカロクは上掲の文章につづけて、次のように述べる。

「一組の労働者が独立を維持しつづけているという事情は、これまで主張されてきたように、彼らが彼らの財貨を、雇主のために働く他の労働者が製造した財貨よりもいっそう安価に売り捌くことを可能ならしめるわけではない。資本の利潤は、後者が製造した価格のなかにも含まれているだけでなく、前者が製造した商品の価格のなかにも含まれているだろう。独立の職人とは、自分自身の資本をみずから直接に管理する資本家の別名であるにすぎない。」(p.66.)

マカロクによれば、商品価値は投下労働量によって規定される以上、「労働によって生産された価値」の一部分が利潤として分配されるようになっても、それによって商品価格が利潤額だけ増大するというわけではない、というのである。

第5項 商品価値は投下労働量によって規定される。だが、商品の生産に投下される労働量とは、生産に直接投下された労働量のみを意味するのではない。マカロクはこの点を説明して、次のように述べる。

「交換価値をもつほとんどすべての商品は、勤労だけでは生産することができない。社会の最も未開の状態においてさえ、狩猟や漁獲に従事する人々を維持するためには、また、彼らが野獣を仕止めることができるようにするために必要な武器を製作するためには、若干の資本が必要であろう。それゆえ、狩猟や漁獲の用具が供給された後では、こういう動物の交換価値は、ただ動物を仕止めるのに必要な労働量だけに依存するのではなく、この目的を達成するのに必要な全労働量に依存するだろう。そして、この全労働量というのは、この用具つまり資本を供給するために必要な労働の一定の割合を含んでいるのであって、この用具がなければ、動物を仕止めることはできなかったのである。」(p. 66. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。)

労働が価値を規定する、と主張する場合、この労働は直接労働だけではなく間接労働をも含むものとして理解されなければならない、とマカロクは説明するのである。

第6項 蓄積の結果、労働の生産物は賃金と利潤とに分割される。しかし、こういう分配事情の変化は商品価値の規定要因を変更させるわけではない。そうだとすれば、賃金が上がれば、物価も上がる、と主張したスミスの見解は、正しいはずがない。マカロクはこのように説きすすめる。

「要するに、賃金騰貴の後でも、商品はひきつづきそれ以前とまさに同じ価格で売れるだろう。しかし、この売上高の分配は賃金騰貴以前とは異なるだろう。——すなわち、労働者に帰属する分前は増加し、資本家に帰属する分前は減少するだろう。あるいは同じことだが、資本の利潤は減少するだろう。」(p. 68. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。)

こうしてマカロクは労働価値論に立脚して推論すれば、賃金の騰貴は物価を引き上げるのではなく利潤を減少させる、と結論しなければならないというのである。この後、マカロクは価値と富との区別について、また賃金と物価との関係について、読者にとって理解し難いところがある文章を書き記している。次節で検討するために、引用文Ⅰ・Ⅱとして掲げておこう。

引用文Ⅰ 「もし各種の商品を市場にもち出すのに必要な労働量が正確に同じ相対的比率で増加するなら、諸商品の相対的交換価値は不変のままにとどまるだろう。けれども、他方ではその真の価格 (real price) は上昇するだろう。その場合、1 ブッシェルの穀物が、その生産費の増加以前と比べて、より多量のモスリンや広幅毛織物と交換されることはないだろう。しかし、それはより多量の労働を表現するだろう。こういう事情のもとでは、諸商品の価格 (prices) は不変のままにとどまるだろうが、社会全体の富と安楽とは減少するだろう。」 (p. 68. ただし、傍点は引用者の施したもの。)

引用文Ⅱ 「しかし、もし諸商品の生産費の一般的・比例的な増加が諸商品相互間の相対価値を変更しないのであれば、どうして賃金の一般的・比例的な騰貴によって諸商品の相対価値が変更されるだろうか。これは明らかにありえないことである。もし賃金が一日につき1 シリングの時に一頭のビーヴァーが一頭の鹿と交換されるとすれば、賃金が一般的に、10ないし20シリングに騰貴しても、同じ交換が行われるにちがいない。ビーヴァーと鹿の市場価格 (market price) は不変のままにとどまるだろう。賃金上昇後には、これらの物の市場価格のなかの、労働者に帰属する分前は賃金上昇前よりも増加するだろうし、資本家に帰属する分前は減少するだろう。〔しかし〕これらの物の真の価格 (real price) は、明らかに、賃金のこういう上昇によっては少しも影響を受けないだろう。これらの物の生産に必要な労働量は増加しないだろう。したがって、これらの物の獲得の難易度は以前と変わらないだろう。」 (p. 69. ただし、傍点は引用者の施したもの。)

これまでに指摘しておいたように、マカロクはこの書評のなかで、「真の価格」の語を、しばしば「自然価格」の同義語として使用してきた。ところが、引用文Ⅰ・Ⅱのなかの「真の価格」を「自然価格」の同義語として受け取ると、全く文意が通らなくなる。そのために、この「真の価格」の語の理解をめぐる、H.トラワーとリカードウとの間に興味ある問答が交わされることになったから、次節でこれを考察しよう。

Ⅲ 交換価値と絶対価値

マカロクの評書を読んだトラワーは、1818年8月23日づけのリカードウあて手紙のなかに、その読後感を記した。

『『エディンバラ・レビュー』の評者は、問題に精通しており、貴兄の体系と意見とに関して評者が与えた一般的概観は、明瞭で申し分ないものです。しかし、評者は御高著からの引用をあまりに割愛しすぎています。それで、いくつかの場合には、原文のほうが注釈よりも説得力豊かであったように思われます。——私には、評者がその批評文のある箇所では、交換価値および価格という難かしい問題を説明しようと努めるにあたって、やや当惑しているように思われます。評者は68頁では、生産のための労働がすべての商品について同等に増加すれば、『それらの物の交換価値は不変のままにとどまるだろう。けれども他方ではその真の価格は上昇するだろう。』と書いています。だが、評者は同じ頁の、もっと下方の箇所では、『こういう事情のもとでは、諸商品の価格は不変のままにとどまるだろうが、社会全体の富と安楽とは減少するだろう。』と記しています。これは確かに矛盾です。評者は次の頁では、賃金の騰貴が諸商品の価格に影響しないということを証明しようと努めるにあたって、それが諸商品の相対価値に影響しないということだけしか証明していないように思われます。』（*Works*, V II, p. 288. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。）

トラワーは、マカロクが引用文Ⅰのなかで、各種商品の生産に必要な労働量が同じ比率で増加した場合には、「その真の価格は上昇するだろう」と書いたり、「諸商品の価格は不変のままにとどまるだろう」と書いたりしていることを捉えて、ここでマカロクが矛盾を犯しているのではないかと述べている。そしてトラワーは、マカロクが引用文Ⅱでは、賃金が騰貴しても商品の「真の価格は……少しも影響を受けないだろう」と書いているけれども、ここで彼が証明したのは、賃金騰貴は諸商品の相対価値には影響を及ぼしえ

ないということだけであって、賃金騰貴が商品価格には影響しないという主張には彼は証明を与えていない、と指摘している。トラローは賃金騰貴と商品価格との関係を論ずるには、賃金騰貴が貨幣価値にどう作用するのかを明らかにしておかなければならないのにマカロクはその点について考察していない、と言おうとしているのであろう。

リカードウはマカロクの書評に対するトラローの批判を読んだ後、9月18日づけのトラローあて返信を認め、次のように書いた。

『エディンバラ・レビュー』に掲載された拙著の書評を御覧になって満足された、とうかがい嬉しく存じます。……また、この書評に対する御所見をお申し越し下さったことにも感謝します。というのは、貴兄が評者の文章のなかに不正確な箇所があることに私の注意を喚起して下さいました。私はこれまではこの点に気づきませんでした。68頁の、貴兄が初めに引用した文章のなかでは、評者は価値という語の代りに価格の語を使っているのです。それを価値の語に置き換えてみて下さい。そうすれば、全文が首尾一貫します。もっとも、あるいはそれでもまだ十分には満足されないかもしれません。というのは、この文章は、多数の論者にとって異議があるかもしれない価値についての私の定義を正しいと考えているからです。次の頁でも、評者は真の価格 (real price) という語を真の価値 (real value) の同義語として使用しているのです。けれども、彼が述べていることは明瞭です。価格という語は、もっぱら貨幣で評価された商品の価値という意味に限定されなければなりません。もしそう限定すれば、商品の価格が騰貴しないのに、その真の価値が騰貴するということがあるでしょう。もし鉱山の採掘と靴の製造とに以前よりも多くの労働が必要になれば、靴の価格がひきつづき不変であるのに、靴と金 (あるいは貨幣) との価値が騰貴するということが起りうるでしょう。」 (Works, VII, pp. 296-7. ただし、傍点の箇所は原文のイタリック。)

リカードウによれば、引用文Ⅰ・Ⅱの文意がいくらか不明瞭になったのは、マカロクが「真の価値」と書くべきところを「真の価格」と書いたため

であって、その点さえ訂正すれば、マカロクの解説は、『原理』初版の価値論の解説として妥当であるというのである。なるほど引用文Ⅰ・Ⅱでは、マカロクは商品の生産に必要な労働量の増減によって直接規定されるのは当該商品の「真の価格」なのであって、その交換価値ではないと語っていた。だから、リカードウは不適切な用語さえ訂正すれば、このマカロクの解説は自説の解説として妥当だと考えたのであった。

これで見ると、マカロクもリカードウ自身も、『原理』初版のテキストには、絶対価値と交換価値との概念上の峻別が記されていた、と考えていたように思われる。『原理』初版刊行の翌年、マカロクの書評をめぐって、トラワーとリカードウとの間に以上のような文通が行われたという事実は、初版のリカードウ価値論の正確な理解のために貴重な資料であるといわなければならない。

ところが、かつてR. L. ミークは、これらの資料を全く検討することなく、「商品の絶対価値とそれに体现された労働量とを同一視するリカードウの傾向」が初版ではまだ稀薄であったこと、そして、この問題に対するリカードウの関心の増大が第3版の刊行以降のことに属したことを主張した。

(cf. R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 1956, pp. 110-20.)⁽²⁾ ミークがこのように主張したのは、初版のテキストでは、第3版やそれ以降のリカードウの文章と比べて、「絶対価値」あるいは「真の価値」という用語の使用度数が著しく少ないこと、またリカードウが「商品の交換価値……を決定する法則は、もっぱらそれぞれの商品に支出された相対的労働量に依存している」(*Works*, I, p. 12. 邦訳, 上, p. 19.)⁽³⁾と書いて、彼があたかも諸商品の相対価

(2) 有江大介氏はこのミークの見解を全面的に支持する論説を発表された。(有江「リカードウの『絶対価値』概念について」早坂忠編『古典派経済学研究(Ⅱ)』所収, 1986.)

(3) 本稿では、リカードウ『原理』初版の頁数については、原典ではなく、『全集』第1巻収録のものを掲げておく。また、本稿で利用している邦訳書の頁数は、羽鳥卓也・吉沢芳樹訳(1987)のものである。

値とそれらの生産に投下された相対的労働量との比例関係のみに関心を寄せていたかのようにみえること、等々の事情のためであろう。しかし、すでに知ったように、マカロクの解説では、リカードウの初版のなかには交換価値と絶対価値との峻別がなされていると判断されていたし、これを読んだりリカードウ自身が、マカロク用語の不適切な箇所を訂正しさえすれば、この論点についてのマカロクによる自説の解説は正しいという趣旨のことを述べていたのだから、われわれはこのリカードウ自身の証言までも無視してミック説を支持すべきではないだろう。

しかし、念のために、われわれは初版のテキストを検討してみよう。次に引用するものは、連続する二つのパラグラフから成っている。

「もしも同量の労働で獲得される魚の分量が減少するか、あるいは獺獣の分量が増加するかすれば、魚の価値は獺獣のそれと比較して騰貴するだろう。これに反して、もしも同量の労働で獲得される獺獣の分量が減少するか、あるいは魚の分量が増加するかすれば、獺獣は魚と比較して騰貴するだろう。／もしも、いつでも、またいかなる事情のもとでも、その獲得にまさに同量の労働を要するために、その価値が不変であるなんらかの他の商品があれば、われわれは魚や獺獣の価値をこの商品と比較することによって、この変動のうちどれだけを魚の価値に影響を及ぼした原因のせいにするべきか、またどれだけを獺獣の価値に影響を及ぼした原因のせいにするべきか、を確定することができるだろう。」(Works, I, p. 54. 邦訳, 上, p. 39. ただし、傍点は引用者。)

二種の商品の交換価値がその生産事情の変動のために変動した場合、それぞれの商品の「価値」はどれだけ騰落したのか。各商品の「価値」を確定する方策をリカードウは探し求めている。彼が初版でも、相対価値の背後にひそむ各商品の「価値」を捉えようと努めていたことは、この一文で明らかである。しかし、次の一文が初版のなかに書かれていたことは、決定的である。「もし一台の改良された機械によって、われわれが追加労働を用いない

で、一足ではなく二足の靴下を製造できるようになるとすれば、一ヤードの毛織物と交換に二倍量の靴下が与えられるだろう。もし毛織物製造業でも同様な改良が行われれば、靴下と毛織物とは以前と同じ比率で交換されるだろう。しかし、それらの物の価値は、双方ともに低下しているだろう。」

(Works, I. p. 277. 邦訳, 下, p. 92. ただし, 傍点引用者。)

二商品相互の交換価値は不変だが、その「価値」は双方ともに低下している、と彼は書いている。この場合、「価値」の低下は当該商品の生産に投下される労働量の減少に直接結びつけて説かれている。この一文のなかに、絶対価値あるいは「真の価値」の語が使用されていなかったからといって、初版では「絶対価値に対する彼の関心は稀薄である」とは言えないだろう。私は旧著のなかで、「リカードウ〔は〕『原理』初版においてすでに、交換価値の背後に絶対価値の存在を認め、投下労働量が直接に決定するものは、この絶対価値の大きさなのであり、交換価値は各商品の生産に投下された労働量を間接的に反映するものにすぎないということを明確に捉えていた」(拙著『古典派経済学の基本問題』1972, p. 257.)と指摘しておいたが、本稿でも同じ意見を述べるほかはない。⁽⁴⁾

(4) リカードウは『原理』第3版では、第1・2版のテキストよりもいっそうしばしば絶対価値あるいは「真の価値」の語を使用したし、1820年以降の彼の手稿や私信のなかでも、しばしばこれらの語を使用した。だが、この事実はリカードウの価値規定修正論の「見解の変更」と関係づけて理解すべき事柄であったように思われる。すなわち、第1・2版で彼が投下労働量による価値規定を修正する要因と考えたものは、賃金率の変動のみであったのに反して、第3版以降では、彼は賃金率の変動によってひき起される相対価値の変動を問題とただけではなく、資本の回収時間に差異がある場合には同一投下労働量によって生産される二商品の間に「価値」の差異が生ずるということを認めたのであった。彼が新たに認めた修正要因についての考察は当然に絶対価値概念の再検討を彼に要請することになったのである。以上については、拙著『リカードウ研究』1982, 第7・8・9章参照。

補論 A. スミスと絶対価値

多数の論者が断言したところとは異なって、A. スミスでさえも、交換価値の背後に絶対価値がひそんでいることに気づいていた。『国富論』の賃金論の章の冒頭に位置する段落のなかの、次の連続する二つのパラグラフには、この論点に明確に言及した箇所が見出される。故意か不注意か、どちらに起因するのか分らないが、これまで論者が言及することがなかった文章だから、ここでは長文の引用を避けることができない。

「土地の専有にも資本の蓄積にも先行する本源的事態 (original state of things) においては、労働の全生産物は労働者に帰属する。彼はともに分か合うべき地主も雇主ももたない。／もしこの状態が継続したとすれば、労働の賃金は、分業によってひき起される労働の生産力のすべての改善とともに増加したことだろう。すべての物は次第に安価になったことだろう。……しかし、すべての物が真に安価になったではあろうが、にもかかわらず、それらの物のなかには、以前よりも高価になるように見える物が少なからずあったかもしれない。つまり、以前よりも多量の他の財貨と交換される物が少なからずあったかもしれない。例えば、大多数の事業で労働の生産力が10倍に改善される、つまり1日の労働が、当初生産していた物の10倍の分量を生産できるようになったけれども、ある特定の事業では労働の生産力が2倍にしか改善されない、つまり1日の労働が、以前生産していた物の2倍の分量しか生産できなかった、と仮定してみよう。大多数の事業における1日の労働の生産物を、この特定の事業における1日の労働の生産物と交換するにあたっては、前者の生産物の、当初の分量の10倍が、後者の生産物の、当初の分量の2倍しか購買しないということになるだろう。それゆえ、後者の生産物のある特定の分量……が以前よりも5倍高価になるように見えるだろう。けれども、本当のところは、後者の生産物は以前の半値になっているのである。」(A. Smith, *Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan, 6th Ed., I, pp. 66-7. ただし、傍点引用者。)

スミスの説明は平明でもあり、説得力豊かでもあるから、ここで彼が事実上交換価値と絶対価値とを峻別する必要があることに気づいていたことについて、スミスの文章を解説する必要はないだろう。むしろ、「土地の専有および資本の蓄積」が行われて以後の社会状態における商品の交換価値の考察では、スミスは交換価値と投下労働量との関係づけについてこれほど明快な分析を与えていない。だが、これは『国富論』に絶対価値に対する関心が全くなかったということの意味するのではなくて、スミスの価値論の独自の理論構造との関連で別個に明らかにされなければならぬ問題である。⁽⁵⁾

IV 「労働」の価値不変説に対する批判

マカロクはリカードウの難解な価値論に平易な解説を与えた点で、かなりの成功を収めたと言ってよい。しかし、いくつかの難点があることも否定できない。私見によれば、リカードウの価値論においては、市場で交換される商品としての「労働」の価値が可変であるという指摘が重要な論点を形づくっていたように思われるのに、マカロクはこの論点の紹介を全く省略して解説を与えており、そのためにマカロクの解説のなかでリカードウ理論は換骨奪胎されるという一面があったように思われる。

リカードウは価値論の章で、通常の労働の生産物としての商品の価値を規定する要因をその生産に投下された労働量に求めたが、あわせて市場で交換される諸商品のなかに含まれる特殊な商品としての「労働」の価値にも論及した。社会の文化水準・風俗・習慣が所与とすれば、長期的・平均的には労

(5) ここではスミスの価値論の理論構造との関連で、スミスの事実上の絶対価値認識について検討する余裕はない。ただ、私は次の二つの旧稿のなかで、スミスの価値論について考察する機会があったから、読者の参照を求めたい。拙稿「スミスにおける価値の源泉」・「スミスの価値論と『初期未開の状態』」(『三田学会雑誌』67の6；67の10, 1974.)

働賃金は、労働者たちが、その種族を増減なく永続することを可能にするだけの、質量ともにある一定の必需品および便宜品を取得できるだけの水準に落ち着くにちがいない。このように考えたうえで、質量ともに一定の賃金財の価値がその生産に投下される労働量によって規定される限り、「労働」の価値は賃金財の価値に依存しているにちがいない、と彼は主張した。そこで、賃金財の生産事情が改善された場合には、賃金は、たとえ上昇することがあっても、それは一時的であるにすぎないのであって、「間もなく、競争の効果と人口に対する刺激とによって、賃金の支出対象である必需品の新たな価値に適合することになるだろう」(Works, I, p.16. 邦訳, 上, p.23.)と彼は論定した。

「労働」という商品は、むしろ、労働の生産物ではない。しかし、「労働」の価値は、労働者の生活維持に必要なだけの、質量ともに一定の賃金財の価値に適合する。そうだとすれば、賃金財の生産事情が変化すれば、賃金財の価値が変動するが、それに応じて「労働」の価値も変動するものと考えられなければならない。「労働」は労働の生産物ではないにもかかわらず、その価値は必需品の生産にとって必要な労働量によって規定されており、必要労働量の変動に応じて変動すると考えられなければならない。したがって、「労働」の価値は不変であり、それゆえに商品の交換価値を測定する真の尺度は当該商品の支配労働量であると説くスミスの見解は、リカードウによって誤りとされる。

商品の価値の規定要因を投下労働量に求める見解は、スミスの創見であった。しかし、スミスは特殊な商品としての「労働」については、それが労働の生産物ではないために、その価値が投下労働量によって規定されるべきものとは考えなかった。スミスは投下労働量による価値規定とは全く無関係な論拠づけによって、「労働」の価値が不変であると説いた。しかし、その結果スミスの賃金論をはじめとする分配論は、彼の労働価値論とは全く無関係な理論的展開を与えられざるをえなくなった。

これに反して、リカードは労働価値論の基礎のうえに経済学の体系化を企てたのであり、この企てにおいて決定的に重要な役割を与えられたのは、スミスの「労働」の価値不変説に対する批判的所見の形成であった。リカードの場合、商品の価値が投下労働量によって規定されるという命題は、すでに証明済みであるが、今や、その商品の生産に従事した労働者に支払われる報酬の価値は、彼らの生活維持に必要なだけの賃金財の生産に投下される労働量によって規定される、というもう一つの命題が定立された。この二つの命題から、利潤は商品の価値から「労働」の価値を差引いた「残余の価値」にほかならない、という結論が引き出される。こうしてリカードは賃金・利潤相反関係命題を定立することになる。これはリカード分配論の核心的命題であるとともに、スミスの賃金・物価連動説に対する批判的所見の、価値論次元における基準でもある。

それなら、マカロクはこれらの論点をどのように解説していただろうか。すでに本稿第Ⅱ節第6項で知ったように、マカロクも賃金・利潤が相反的關係において運動することを指摘するとともに、スミスの賃金・物価連動説を誤りとして斥ける。しかし、マカロクの場合には、商品価値が投下労働量によって規定されるという命題が確認されただけであって、「労働」の価値を規定する要因は明示されることがなかったから、商品価値が賃金と利潤との二者に分割される社会状態にあっては、賃金と利潤とは相反関係に立つと主張されても、賃金と利潤とのどちらが独立変数で、どちらが従属変数であるのかは明らかにはされていなかったということになる。リカードの場合、利潤はあくまで「残余の価値」として捉えられなければならぬものであるから、それは賃金の変動に従属して変動するものと考えられていたのに、マカロクの解説では、賃金と利潤とはただ単に相互に依存し合って反対方向に変動すべきものとして描かれたにすぎないのである。

だが、「労働」のみが唯一のそれ自体の価値不変の商品であるのだから、商品の交換価値の真の大きさはその商品の支配労働量に等しい、と主張したス

ミスの見解に対して加えたリカードウの批判的所見がマカロクの解説のなかで少しも紹介されなかったということは、彼の解説にもう一つの欠陥を生み出すことになったように思われる。

すでに本稿第Ⅱ節の第2項および第4・5項で知ったように、マカロクの解説では、スミスが資本蓄積とともに商品価格が賃金と利潤との二者によって構成されるようになり、したがって、価格が賃金や利潤の変動に依存して変動するようになると考えたために、スミスは投下労働価値論を放棄したのだと説明されており、こういうスミスの見解に対してリカードウが、商品価値は蓄積の前後を通じてつねにその生産に投下された労働量によって規定されており、蓄積によってひき起される生産物価値の賃金と利潤とへの分割は労働価値論を保持することを妨げる理由になるわけではなく、したがってスミスの価格構成論およびその系論としての賃金・物価連動説はともに誤りだという批判を加えた、と説明されている。

こういうマカロクの解説は、スミスの見解の紹介としても不正確であり、スミスに対するリカードウの批判的所見の紹介としても間違っているように思われる。この論点に関してマカロクの解説が不正確になった理由は、私見によれば、マカロクがリカードウ価値論における支配労働＝価値尺度説批判の理論的意義を看過したためであったように思われる。それなら、リカードウは初版のなかで、この論点に関するスミス説をどのように理解し、どのように批判していただろうか。1818年12月28日づけのリカードウのミルあて手紙は、この論点に関する『原理』初版の論述内容を理解するための重要な資料である。

リカードウのこの手紙には、『エディンバラ・マガジン』(The Edinburgh Magazine) 1818年10月号に掲載された「交換価値に関するリカードウ氏の学説に対する批判」という表題の論説⁽⁶⁾に対する反批判の文章が記されていた。この論説には、ただR.という署名しか記されていなかったが、筆者はR.トレنزであった。そこで、トレنزのリカードウ批判の要点を、まず紹

介しておこう。

トレンズは言う。——「資本が特定の人々の手に蓄積され、この人々が資本を勤労民衆の就業に用いた後には」社会の産業諸部門に等額の資本が投下されても、投下資本のうちに占める原材料の購入にあてられる部分と賃金の支払にあてられる部分との割合は異種部門間では等しくなるだろう。だが、部門間の利潤率は均等化される傾向があるから、異種部門に投下された「等額の資本の使用によって獲得される所産は、市場で等しい価値をもつことになるだろう。それゆえ、等額の資本が概して不等量の労働を活動させる、あるいは同じことになるが、等量の労働が不等額の資本によって活動させられることになるのだから、等量の労働の生産物は不等の価値をもつということになるだろう。」こうしてみると、スミスが蓄積以後の社会状態を労働価値論の適用範囲から除外したのは、至極妥当な措置であって、こういうスミスの見解を批判するリカードウ氏のほうが間違っている。——

リカードウはミルあての手紙のなかで、次のように書いた。「事実はトレンズがスミスの意見を公正に伝えていないということなのです。……アダム・スミスの考えは、社会の初期の段階には労働の全生産物が労働者に帰属するのだから、そしてまた、資本が蓄積された後では〔生産物の〕一部分が利潤になるのだから、資本の耐久度の差異その他の事情を少しも考慮しないでも、蓄積は必然的に商品の価格ないし交換価値を上昇させるのであり、したがって商品の価値はもはやその生産に必要な労働量によっては規定されなくなる、ということだったのです。私が彼に反対して主張しているのは、交換価値の変動は、このような〔生産物の〕利潤と賃金とへの分割のために起

(6) [R. Torrens,] *Strictures on Mr. Ricardo's Doctrine respecting Exchangeable Value, The Edinburgh Magazine*, Oct. 1818, pp. 335-8. なお、この論説については、私は以前論及したことがある。(拙著『リカードウ研究』pp.175-7.) また、中村廣治氏も次の論考で論及するとともに、このトレンズの書評論文を訳出しておられる。(中村「トレンズのリカードウ価値論批判」大分大『経済論集』29の3,1977.)

るのではない——つまり、資本が蓄積されるために起るのではないのであって、社会のいかなる段階においても、交換価値の変動は、ただ次の二つの原因だけによって起る。つまり、一つの原因は必要労働量の増減であり、もう一つの原因は資本の耐久度の差異である。——ただし、前者の原因はけっして後者の原因によってとって代わられるのではなく、ただ修正されるにすぎない、ということなのです。」(Works, V II, p. 377.)

この文章は、気心の通ずる友人あての私信として書かれたものであるためか、かなり舌足らずであって、分り難い。そこで、私が理解したところを記すことにしよう。

リカードウはこう考えている。——スミスが蓄積後の社会ではもはや投下労働量は商品価値の規定要因にはなりえないと主張したのは、スミスが異種産業部門では利潤率が均等になるため、等額の資本の生産物は等価になるのに、それはけっして等量の労働の生産物ではないのだから、この社会状態においては商品価値は投下労働量によっては規定されていない、というように推論したからではない。スミスの考えでは、初期の段階には労働の全生産物が労働者だけの所得になったから、生産物の支配労働量はその生産に投下された労働量と等しかった。しかし、蓄積とともに生産物は賃金と利潤とに分割されるから、生産物の支配労働量は投下労働量よりも大きくなる。だが、「労働」という商品のみがそれ自体の価値不変の唯一の商品であるのだから、商品の交換価値の真の大きさはその支配労働量に等しい、とみななければならぬ。そうだとすると、蓄積は「商品の価格ないし交換価値」をその生産に投下される労働量によって規定される場所よりも「上昇させる」ものということになる。スミスはこのように考えて、蓄積後の社会を労働価値論の適用範囲から除外したのだ。

こういうスミスの意見に対して、自分〔リカードウ〕はこう考えている。——「労働」の価値は不変ではなく、したがって商品価値の真の尺度は支配労働量ではない。だから、蓄積に伴う階級分化は確かに生産物の支配労働量

をその生産に投下された労働量よりも大きくするけれども、それは「商品の価格ないし交換価値」が投下労働量によって規定される場所よりも「上昇」したということの意味するのではない。生産物の支配労働量はその生産に投下される労働量と等しくなくなったということは、蓄積後の社会では支配労働量が価値の尺度にはなりえないということの意味するにすぎない。この事態に直面して、スミスは投下労働量による価値規定を放棄したが、真に放棄すべきは支配労働＝価値尺度説のほうだったのだ。

スミスは蓄積後の社会を労働価値論の適用範囲から除外することによって、価格構成論に移行し、賃金・物価連動説を展開することになるが、こういうスミスの見解も誤りである。しかし、自分〔リカードウ〕も蓄積後の社会の商品の交換価値がつねにもっぱら投下労働量の増減のみに依存して変動する、とは考えていない。蓄積の進展とともに異種産業部門に投下される資本の耐久度には差異が生ずるから、各種商品の生産事情が不変であっても、賃金率の変動が商品の交換価値に変動を及ぼすもう一つの原因として作用するという点は、初版ですでに指摘したとおりだ。ただし、これを認めることは、賃金・物価連動説を承認することではない。商品価値の主要な規定要因は依然として投下労働量なのであって、賃金率の変動が価値に及ぼす影響は、あくまでも主要な規定要因に対する副次的な修正要因の作用にすぎない、と考えられなければならない。――

18年12月のリカードウのミルあて手紙は、彼自身が彼の著作初版の論述の真意をミルに伝えようとして書かれたものであった。してみると、彼は18年夏にマカロクの評書を読んで大いに満足したけれども、彼とマカロクとの間にある距離があることにも気づいていたのかもしれない。⁽⁷⁾

(7) リカードウ『原理』初版刊行直後の、1818年に発表されたマカロクの評書やトレンズの批判論文は、古典派経済学の研究にとって重要な資料だが、私がこれらを読する機会をもつことができたのは、福原行三氏の御好意に負っている。この機会に、氏に対して心からお礼を申し述べたい。